

極樂通信

UBBU



Vol. 19



photo:Y. Hori

やもりである。バリではこの小さいやつはCecakという。この親玉は全長も30cm近くとなり、Tokekと呼ばれる。バリに滞在してこいつの鳴き声を聞いたことがない人は、たぶん超高級リゾートホテルのエアコンが効いた部屋にしか泊まったことのない人である。

その鳴き声たるや、知らずに寝ている人なら近くではじめて聞くと、どえらいびっくりしてまう。(なぜか名古屋弁になってしまうくらい)そして暗闇の中のベッドで得体の知れない化け物を想像して恐怖するのである。

しかし慣れてしまうと、この声なくしてはバリの夜の風情がないかと思ってしまうし、鳴きはじめの「ケケケ...」という予兆を察して鳴き声を数える準備までしてしまう。鳴き声の数にはいろいろな説があるようだが、どうやらより多くの奇数回(11回とか)を聞くと幸運ということらしい。

困ることといえば、成長したやつの糞には注意した方がいい。天蓋付きのベッドが意外なところで役立っていることはあまり知られていない。

でかいTokekはさておき、小さいCecakは結構かわいい。蚊も食べてくれるし「家守」と書くくらいだから、できれば日本の部屋で飼いたいくらいである。

天蓋付きのベッドはないけど。

堀 祐一

Contents

● Kabar Baru Berita Lama		● Peliharalah Lingkungan UBUD	
デートスポット in BALI-----	4	Ubud の環境を考える-----	21
UBUD の泥棒の傾向と対策-----	5	● TOKO BEST 店	
パリの SAEAH と Dewi Sri-----	6	Bagus Collection-----	22
● Perawatan Anak		● Warung 味な店	
正しい出産と育児 in BALI -1- -----	8	Bebek Bengil-----	22
● Cinta Pohon BINGIN -1-		● Pondok Manis 私の常宿	
愛しのバンヤン樹 -1- -----	10	Sari Bamboo Bungalows-----	23
● 留学生日記 / 1		● Pesan & Kesan	
コス探し-----	14	旅人一声-----	23
● C・O・L・U・M・N		● Berita Terbaru	
オゴオゴ見物のススメ-----	15	その他のニュース-----	24
● JEGOG -1-		● Orang-orang Ubud/19	
JEGOG / はじまりにあたって-----	16	うぶんな人々 / 19-----	25
● BUKU-BUKU		● Pengumuman	
神話大戦・ラーマヤナ編-----	20	でんごんぼん-----	26
● Apa Itu?			
これなあ〜んだ?-----	21		

○表紙のことば○

ウブドは親子井がうまい
ウブドは頭がカラになる
ウブドは昼寝が一番
ウブドは蚊に刺される
ウブドは風が気持ちいい
ウブドは仕事にならない
ウブドは夜の犬が怖い
ウブドはいいダバカン

編集室便り

●入稿に関するお願い

編集部では、Macintosh による DTP 作業で版下を作成しています。原稿をお寄せくださる方で Text Data で入稿可能な方は、以下の方法をお願いします。

Macintosh format の FD (Text Data)
 Dos format (2DD-720KB) の FD (Text Data)

E-Mail :

MHC03202 : 菅原 (NiftyServe)
GCB01162 : 堀 (NiftyServe)
hori@potomak.com (Internet)
eriko@potomak.com (Internet)

※詳細は、裏表紙にある日本連絡先事務所までお問い合わせください。

デートスポット in BALI

「恋人」のことをインドネシア語で「パチャール」という。ちなみにバリ語では「トゥナガン」。そして、ぶらぶら遊びに出かけることを「ランチョン・ランチョン」という。「パチャール・パチャラン」というと「恋人ごっこ」のような意味になる。ちょっと前、インドネシアでヒットした歌謡曲に『パチャール・パチャラ〜ン・ディ・プ〜ラント』(月の上で恋人ごっこ)なんて歌があったが、いったいバリの若者、特にUBUDの青年たちはどこへランチョン・ランチョンするのだろうか。

デートには、まずスベダ・モートル(バイク)が必要不可欠のアイテムである。自分のスベダ・モートルがない場合には、友達からピンジャム(借りる)しなければならない。いつもピンジャムするというわけにもいかなので、どうしてもスベダ・モートルが欲しくなり、K・T・P(身分証明書)を担保にローンで購入する。そのスベダ・モートルはローン返済のためにレンタ・バイクになる。

そして、問題のデート・スポットであるが、まずはポピュラーなところで、パンタイ(海岸)である。近場では、スカワティのパンタイ・サバ。ちょっと足を延ばして、サヌールの海岸がスポットのようである。サンセットから夕焼けを見にでかけるカップルが多い。

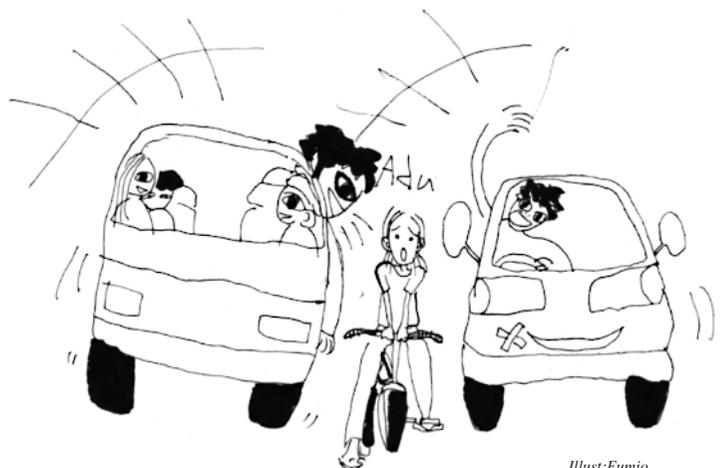
夕食はギアニャールのセゴール(夜店)が人気。特にイカン・ゴレン(魚の唐揚げ)の店に人気が集まっているようだ。かなり親しくなった恋人同志は、キンタマーニのバトゥール湖畔にあるトヨ・ブンカに出かけるようだ。「寒い寒い」と言いながらホットな恋を語り会うのだろうか。ここまでの話は、私のまわりにいる、あまり金回りのよくない若者の場合である。少し金回りがよくなると、デンパサールの映画館で映画を観たり、スーパー・マーケットでショッピングをするようになる。

それでは、読者のみなさんが一番気になっている、セックスはどうしているのか?という、彼らは、宗教上の理由でセックスをしません。な〜んで影武者のIさんじゃあるまいし…??。スベダ・モートルをピンジャムするぐらいだから、もちろん車は持っていません。したがって、カー・セックスという言葉はまだバリ

にはありません(な〜んで言い切っちゃっていいのかな)。

“さかさくらげ”(これはもう死語です)。“連込みホテル”(これもすでに死語です)。“ラブ・ホテル”(もしかしたらこれも死語なのかも)。そう、読者の皆さんが日頃疑問に思っている「バリにはラブ・ホテルがあるのか?」の質問にお答えしよう。

UBUDには観光客向けのホテルはたくさんあるが、バリの一般的若者にはそれを利用するには高くても手も足もでない。それではいったいバリ人向けのラブ・ホテルはあるのだろうか?。あるレストランの従業員B君に聞いたところによると、サヌールにあるという。それは売春宿のことではないのかと問い正したところ、間違いなくラブ・ホテルだという。観光客向けの安宿で休憩できる場所もあるという。それではいったい、ホテル代のお金もないという若者は、どうしているのか。聞くところによると、夜空の下ということもあるが、デンパサールのルノンという高級住宅街の一角に公園のような所があり、肩ほどの高さの繁みがおしげっていて、そこは昼間からパチャール同志が熱いひとときを過ごしている。が、ほとんどが友達の家や親戚の家に遊びに行くそうだ。そしていつのまにか、彼女の部屋だったり、彼の部屋だったりして、そしていつのまにか妊娠、そして、結婚にゴール・インというのがバリの若者のデートから結婚へ的一幕のようだ。



Illust:Fumio

UBUD の泥棒の傾向と対策

近ごろ UBUD も、ホテルやバンガローに泥棒が出没するようになった。悲しむべきか、それとも、それは現代では普通と考えたらよいのだろうか。「昔はよかった、テラスに財布やカメラを置き忘れてもなくならなかった」なんて、懐かしんでいてもしょうがない。個人個人で泥棒対策に心がけなくてはならない。

泥棒が多発する時期がある。それが不思議にも、イスラムのラマダン（断食明けの祝日）の日が近づくが増えるという傾向にある。パリに出稼ぎに来ていて、ラマダンで里帰りする時、故郷の家族にお土産やお金を持って帰りたいのは人間の心情であろう。それに困った人々が悪事を働くのだと、そんなもともらしい話を聞くと、イスラムの人には申し訳ないのだが、ちょっと疑ってしまう。今まで泥棒といえば、決まってバリ島以外の人とバリ人に聞かされてきた。そして、私もそれを信じていた。しかし、今では、バリ人の泥棒も多いという。

UBUD は南北に走っている道路と道路の間に、ココナツやさまざまな木々が生い茂っている林がある。その木々の脇には必ず川が流れている。川の端は畑になっていることが多いが、崖崩れ対策からココナツなどの木を植えてあり、小さな森を形づくっている。それが、反対側の道路や建物を隠し、どこにいても視界に緑の広がりを見ることができる。

ホテルやバンガローの正面は道路に面していて、裏は景色を望めるように、ほとんどのホテルがオープン設計になっている。UBUD の人々の住宅も裏が川ということが多く。バリ人のお宅を訪れて、裏の竹林を抜けてマンディーヤやトイレにいった経験はないだろうか。ライス・フィールドの向こうの森には川があるというわけである。そして、泥棒はその川淵に潜み、夜を待って行動する。泥棒の徘徊する時間帯は、だいたい PM: 10 時から AM: 2 時頃が多い。川添いのホテル十数軒が軒並み入られたことがあった。

シーズンは通説のラマダン以外はやはり、観光客の多い時期の 7・8・9 月に多発する。そして、大雨の日や月の出ない新月の日の近くなどに特に多く出没するという。

「今日に限って、遅く帰った」「今日に限って、酒を飲んでた」「今日に限って、トイレに起きなかった」

などなど、今日に限ってという話を被害にあった人からよく聞く。まったく気が付かないことが多く「マジックにでもかかったようだ」という。

盗まれるものは、やはり現金や貴金属、そしてカメラ、時計、ラジカセなどの小さくて高価なもの。泥棒の趣味なのか、ジャンパーやスニーカーがなくなることもある。前もって観察されていることもあり、いつも大事に抱えているバッグや、肩からぶらさげている高価そうなカメラが狙われる。高価なものは、あまり人目にさらさないほうがよいようだ。まず、狙われそうなものは持たないのがよいのだが、そうもいかないのが、預けられるホテルでは預けるようにしよう。セキュリティのしっかりしているようなホテルを選ぶことが一番だが、それとても不安である。とにかく、部屋に入られないように鍵をガッチリとかけることが大事だ。

泥棒は二人以上で行動しているようで、見つければ居直り強盗になる可能性もあるので、充分注意しよう。



Illust:Fumio

バリの SAWAH (田んぼ) と Dewi Sri

BALIの田んぼは、見ていて飽きない。BALIのほとんどの地域は、土壌が大変肥沃である。今でもたまに小さな噴火をおこす2,000メートル級のバトゥカウ山やバトゥール山は、昔から火山灰をバリ島中にまきちらし、それぞれ大きなカルデラ湖を持って、常に島の大地を潤してきた。耕地面積は、なんと島全体の60パーセント以上にもおよぶという。熱帯地方特有の深い谷があちこちにあるような複雑な地形を、みごとにそのまま生かして、バリの田んぼは作られている。ツーリストはそれをライステラスと呼び、バリ島観光の目玉のひとつにもなっている。日本にも田んぼはあるが、稲の収穫は年に一度で、田植えが春、稲刈りが秋とほぼ決まっている。それはそれで季節の風物詩としていいのだが、バリの田んぼはもっとユニークだ。米の種類によっても違うが、二期作または三期作のために田植えや稲刈りの時期が、それぞれの田んぼによってまちまちなのである。だからひとつの景色の中に、田植えの田んぼと稲刈りの田んぼが同時に見られることもある。

稲刈りが終わると、ほんのしばらくの休憩の後、再び水が引かれ、ベベ（アヒル）が放される。農薬をつかわずに害虫の駆除ができるというわけだ。ベベは、おしりふりふり元気に動き廻って、こっちの田んぼからあっちの田んぼと渡り歩く。そして、丸々と太ったベベは、お供え物や食用になる。まさしく一石二鳥である。ひととおりベベが害虫を食べ、肥やしをたっぷり施したところで、次は牛の登場だ。愛らしい目をしたバリの茶色の牛は、ここでは食用としてではなく、田んぼを耕す労力として飼われている。しかし、最近



は耕耘機によって取って替わられた地域も多い。さて、綺麗に耕されて一面に水が張られた田んぼは、まるで鏡のモザイクのようだ。バリの田んぼは、日本のようにカッチリ同じ大きさの長方形ではない。傾斜地の隅々まで曲線にかたどられた小さな一枚の田んぼとなっているのである。田んぼに映る朝焼け、夕焼けも美しいが、田ごとに映る月は特に絶景である。月のない夜には、チャリ・リンドウン（田ウナギ取り）のカンテラの灯りが、あちこちで光線を発し田んぼを映し出す。たにしやカエルをつかんできては食用にする。昔はこれをパサール（市）に売ってお金に換えたそう。山あいの田舎に行くと、そんな田んぼの中にホテルの乱舞を見ることができる。それは、この世のものとは思えない神秘的な美しさだ。――筆者が以前、日中のフライトでバリ入りをした時のこと。ちょうどよく晴れた真っ青な空に、綿菓子のようなふわふわの雲がボカリボカリと浮かんでいるのが飛行機の窓から見えていた。もうすぐUBUDの上空あたりかな？と何気なく下を見ると、そこには無数の<田ごとの青い空と雲と太陽>があったのである。自然をそのまま万華鏡にしたような感動的な風景だった。

やがて田んぼには稲の苗が植えられ、緑色の絨毯がひかれたようになる。時おり、微風に揺らぐ苗が微妙な光の反射を演出する。畦道が狭く切り落とされ、黒い土肌と緑のコントラストがまた美しい。ココカン（白鷺）が数羽餌をついばみに、優雅に降下してくる。そして、夕方になるときれいな「く」の字の編隊を組んで、プトゥルの村に帰る。

稲刈りの時期になると、大勢の女性達が夕暮れになるまで忙しく働く。稲刈りも脱穀もまだ手作業である。バリも今は農家の人手不足と後継者不足で、持っている田んぼを人の手に任せたり、ジャワからの出稼ぎ労働者に頼んだりしているところもあるそう。これも時代の移り変わりであろうか。バリ人の友人のパパ（父親）が「昔、田んぼの仕事は楽しかった。朝まだ暗いうちに出掛けて、一仕事終わったら PONDOK（簡単に作られた小屋）で弁当を食べる。白いご飯とサンバルだけでも、ああいう時に食べるとそれは旨い。一服して昼寝して、夕方に帰ってくる。一日中田んぼにいて、ボーッとしていても飽きなかった。今はビジネスが忙



しくてストレスがたまってしまえばかりだよ。」とこぼしていた。

そんな BALI の田んぼのあちこちに、石や竹で簡単に作られた、小さなほこらが幾つも立っているのを皆さんは見掛けたことがあるだろうか。そのほこらは、バリ・ヒンドゥー・ダルモの Dewi Sri (デウィ・スリ) のために立てられている。デウィ・スリは生きる力を司るウイヌス神の妻と言われ、稲、田んぼ、そして大地の女神としてバリの人々に崇められている。月の女神、デウィ・ラティと並んで、たいそう美しい女神だそう。畑や田んぼだった土地にこれから新しく建物を建てたり、井戸を掘ったりする時は、ムチャル (お祓いの儀式) とともに、必ずデウィ・スリに捧げるお供え物が必要だ。――ひとつのほこらの前で、マンク (司祭) と正装したバリ人の家族3~4人がお祈りしている。

これから始まる田植えの安全と稲の豊穰を祈っているのであろう。大地は女性、だから田植えは男性の仕事だという。田植えは地球に種を植え付ける儀式である。そして、稲刈りは女性の仕事と分担が決まっているのだそう。

バリには、先進諸国の近代的灌漑システムに勝るとも劣らない独特の水利技術と、それを支える田んぼの組合「SUBAK=スバック」がある。前にも書いたとおり、バリの地形は山あり谷ありで高低の差が激しく、正確で緻密な灌漑テクニックがないと、とてもバリ中の田んぼを隅々まで潤すことはできない。バリではおそらく何世紀も前から、自然に水が流れる力を利用した高度な土木技術が発達していたと思われる。そんな複雑な水利技術を管理しているのがスバックである。それにスバックで共同にデウィ・スリや水の神である Wisnu (ウイスヌ) を祀ることによって、自分勝手に自己中心的な考えをする人がいなくなり、水を奪いあうような状況には決してならないのである。そんな水利組合・スバックのプラ (寺院) もオダラン (寺院祭礼) の時には数々の奉納儀礼や芸能が催され、大勢の人々で賑わう。お祈りにやって来るのは、スバックの組合員だけではない。その村の村人たち総出である。

あの美しいライス・テラスこそ、バリの人々の心の象徴ではないだろうか。自然との調和、そして人々の調和。美しい女神、デウィ・スリに見守られてバリの田んぼは、いつまでも豊かに稲を実らせるに違いない。



正しい出産と育児



by ムーン・ストーンの花嫁

NOMOR 1

はあ、やっと筆がとれるようになったこの頃である。編集長から子育ての話を早く書けとせかされていたのだが、ひとことで子育てと言われても、いったい何から書き始めていいのやら皆目見当がつかなかった。経験のあるお母さんはよ〜くわかると思うが、ただでさえ出産&育児というのは本人にとって大事件であり、毎日がハプニングであり、驚きであり、笑いであり、涙なのだ。それもバリで、である。もう、ぶつとぶつとが多すぎて、頭ぐるぐるの連続。その時は気が狂いそうになるほど、シリアスに悲劇的になるのだが、あとで考えてみると、すべてが大笑いで「これは、書ける！」と思うのだ。バリで子育てをしている外国人女性はいっぱいいるので「今さらそんなこと」と鼻であしらわれてしまうかもしれないが、「出産&育児」というフィルターを通して見る Bali は、またおもしろいものである。できるだけ毎回シリーズで書くつもりなので、みなさん楽しんで読んでください。

■第一回:感動と驚愕のU・S・G(ウー・エス・ゲー)

「うわっ!!+ (プラス) だあ!」とりあえず友人にもらった妊娠判定薬を使ってみたのが、おとしの12月。前から子供が欲しいと思っていたのだが、いざ妊娠がはっきりしてみると、結構驚くものである。自分のお腹の中に何か異星人でも飼っているような不思議な感じ。以来、妊娠が決定的になってから、デンパサールの産婦人科のドクトルに定期検診に月に一度通うようになった。村の助産婦さんじゃ、ちょっと心配だったので、友人であるバリ人の踊り手A嬢に尋ねたところ、「S医院がいいわよ、外国人もたくさんそこで産んでるし」と紹介されたドクトルである。

まず最初の検診。名前を呼ばれて、ひとりで診療室に入る。ちょっとドキドキ。小さな部屋に通されると、デンと置かれた立派なデスクの向こうに、若い頃の岡田真澄を少し太らせて少しスケベにしたような、ドクトル・Sが、ニコニコ微笑んで座っている。気持ちを落ち着かせて、最後の生理はいついつで、判定剤を使ったらプラスだったこと、など自分からハキハキと述べる。するとドクトル・Sは、何を思ったか急に大きさに悲しそうな顔をして、「オ〜ウ、残念です。手術は簡単ですよ。妊娠したのは初めてかな?」「は?手術…?!」

どうやらドクトル・Sは、何の根拠もなしに、私が中絶しに来たと思ったらしい。このドクトルは、外国人女性がひとりで受診しに来たらみんな中絶だと勝手に決めつけるのだろうか…。のっけから私を不安にしたドクトル・Sであった。が「へ?! 産みたい? オ〜ウ、そ、それはよかった。うん、よかった。ワッハッハ」と大きさに笑っている顔がなんとなく無邪気で、とりあえずこの医者に通うことにしたのである。そして、体重を計る…が、ドクトル・Sは、「オ〜ウ、リマプルキロー、バゲース、バゲース (50キロですね〜、よかった、よかった)」と言うだけで、それをカルテに書きとめるでもなし、ほかに血圧を計るでもなし。<日本では血液や尿の検査をするのに…?>ここではこんなものかとたかをくくっていたら、とんでもなかった。聴診器をお腹にあてると胎児の心音が聞ける<超音波ドップラー法>という機器が、ここにはあった。まだ、妊娠10週目位だったのに、もう私のお腹の中からは力強いBABYの心音が「ドクン、ドクン」と聞こえてくる。……感動……

恐れていた内診(直接〇に手を入れて、子宮口などを調べる)もなかったし、心音も聞けてルンルン気分である。

二回目の検診も同じ。体重計に乗って、「オ〜ウ、リマプルドゥアキロ〜、バグース、バグース、ワッハッハッ。」何がおかしいか知らないが笑われて、はい検診おわり。

さて、話は横道にそれるが、実は、この時点でようやくお腹のBABYの父親との結婚話がまとまった。一時はあわやく未婚の母か…>と覚悟していたのであるが、結局バタバタと決まった。一回目と二回目の検診の時は、結婚のケの字も出ていなかったのだが、それでも現・夫のDは、最初の検診から一緒についてきてくれた。が、決して診療室の中までは入ろうとしなかった。待合室で居心地悪そうに座っているか、「ちょっと外へタバコを」と言いながら、その足で斜め向かいのバビグリン屋へ入って行ってしまふ。短気なDは、<待つ>ことが大の苦手で、どんなシチュエーションでも、何かを<待つ>椅子に座ると5秒もしないうちに貧乏ゆすりを始めるのである。

さて、めでたく結婚の話がまとまったところで、第三回目の検診。この時すでにBABYは4カ月目に突入。名前を呼ばれて、いつものように診療室に入ろうとすると、なんとDは、自ら先に立って中まで入っていくではないか！私のショルダーバッグを肩からかけて、顔をコチンコチンにこわばらせている。実際この姿だけでもおかしかったが、彼の勇氣ある行動に敬意を表すため、あえて私は黙っていた。ドクトル・Sも、初めて私の相手を見て、「おっ?! ×○△×○△△○×」とバリ語で気さくに話しかけたが、Dは「ン、ンゲー、へへへ」と照れ笑いするだけだ。もっと堂々としていればいいのに…、でも、こういう場所では、男はみんなこんなもんかもしれない。今回も、体重計に乗って「オ〜ウ、リマプルリマキロ、バグース、バグース、ワッハッハッ」と笑われておしまい。かと思っていたら、ドクトル・Sが言った。「お腹の赤ちゃんを見たいかね？」驚いたことに、ここには超音波断層法の機械があったのである。なじみのない人にはピンとこないだろうが、これは探触子という昔のレコードクリーナーのような形をした機器をお腹に当てると、モニターの画面に不鮮明ではあるが、お腹の中の胎児の様子が映し出されるという文明の利器である。ここでは、この機械のことをU・S・G（ウー・エス・ゲー）と呼ぶらしい。ドクトル・Sでは本人の希望によってのみ、このU・S・Gを使ってもらえる。その場合、通常の診察料Rp.15,000が一挙にRp.70,000に跳ね上がるのは、あとで知ったことである。値段のことはさて置き、私はさっそくこのU・S・Gを使ってもらうことにした。私にとってもこんな体験は初めてだし、ましてやDにとっても少しは父親になる実感を味わえるだろうし。

診察ベッドの上に乗って、ここで恥ずかしがってはカッコ悪いと思い、潔くスカート裾をまくり上げて堂々と、膨らみ始めたお腹を出す。ドクトル・Sが、「ハイ、パンツもちょっと下げてね〜」と指示を出す。下腹部全体が丸出しになる。「ホラホラ、ダンナさんはなんでそんなすみっこにいるの、さあ、こちらに来なさい」とドクトル・Sに促されてU・S・Gの画面の前に立ったDの顔は、もう緊張のあまり、こわばりきっている。私のバッグを胸の前に抱えて借りてきた猫のように小さく縮まっている。まるで大人のおもちゃの店に迷いこんだ小学生のようだ。肝心の画面には、白黒のまだら模様にはザアザア雨が降っているようなものが映っているだけである。ドクトル・SはDを安心させる(!?)ために、バリ語で何やら説明しながら探触子を動かしていく。そのうち、微かに脈打っている心臓みたいなものが見え、背骨らしきものも見えた。…と突然ドクトル・Sは、「おっ!! ラキラキ(男)だぞう!!」と叫ぶ。かねてより私は、自分の小さな息子が、オダランでパリスを踊るのを舞台の袖からあたたかく見守る母になるのが夢であったので、大感動である。それに、初産から結構高齢出産に近かったので、初めから男の子を産んでおけばあとは気が楽だ。私はもう嬉しくて、診察料のRp.70,000も気前よく払い、ヘラヘラ笑いながら診療室を出た。Dは、よほど感動したのだろう、無言で何かを考え込んでいるようだ。二人はそれぞれに感激を噛みしめながら、無言で駐車場まで歩き、静かに車に乗り込む。私は堪えきれず、うっすら目に涙をためてDに言う。「…、男の子…だったね…。」Dは私の方を見ずにハンドルを両腕に抱えたまま、難しい顔をして黙っている。そんなに感動が大きかったのね…と思いきや、ほそっと一言「7万ルピアもするんだ…。」…。

診察料が高いことに、ただ驚いていただけだったのである。(笑)



Illustr:Fumio

愛しのバンヤン樹

Cinta Pohon BINGIN

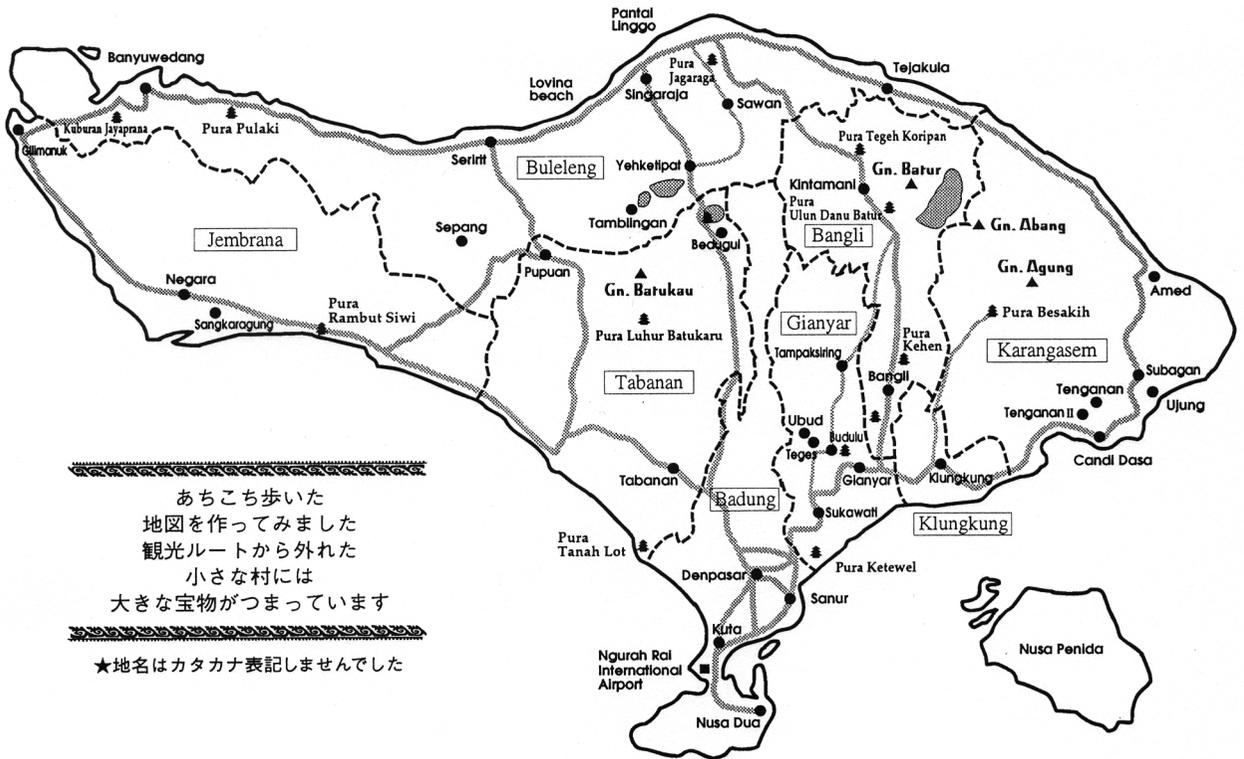
1

小野寺あつこ

バンヤン樹に逢うためにBaliへやって来た。
Baliについて知ってることは、Gamelanのことだけだった。
言葉はもちろん知らない。人には、さっさと見切りをつけて
ただ、ただ、まだ見ぬ愛しのバンヤン樹に逢いたかった。
旅行は、もちろん好きじゃない。それでも、あちこち歩き回る。
自分のいる場所を見つけるために。または、自分の死ぬ場所を見つけるために。
そんな自分が帰る頃には、Baliの人たちと世間話がしたいと、
少しずつインドネシア語やバリ語を覚え始める。これがムチャ楽しい。
今、Baliの全てがいとおい。
木も人も動物も虫も、風も光もほこりも石も。
ギューとギューと抱きしめたくなるー。
ゆみさん、私も写真集“Orang Bali”を見て泣いた一人です。
Ubudを中心にあちこち訪れた村、カタコトのインドネシア語でいるんな人たちと
話したこと、Gamelan、お祭り、木たち、一つ一つを綴ってみました。



Tengananのバンヤン樹



あちこち歩いた
地図を作ってみました
観光ルートから外れた
小さな村には
大きな宝物がつまっています

★地名はカタカナ表記しませんでした

ゴング・グデ 三つGong Gede — Bangli Tanggahan —

Bangliのお祭りへ行くために揃えた^{トゥンバツ・ブンガ} Tempat Bunga、^{トゥンバツ・ティルタ} Tempat Tirta。花の場所、聖水の場所。う～ん、いいネーミングと思っていたら、Tempatって入れ物っていう意味もあるんだ。

花とお香を添えて、いそいそとでかける。Bangliまでの静かな田舎道を、夕日を見ながらトコトコバイクで走るのは気持ちいい。

Pura Dalem に着くと、ランダの塔からあやしい光が漏れている。

会場で Gamelan がはじまる。小さな村のお祭りだけど、三つの村が集まって^{チャロナラン} Calonarang をやるらしい。そこで三つの Gong Gede の演奏だ。一つの村が演奏をしている間、他の村の人たちは舞台の上でコピを飲んだり、タバコを吸ったり、お菓子を食べて待っている。

私はこの Gong Gede が大好き!! トロンポンは優雅、クندانとチェンチェンはスリリングでかっこいい! どの村の Gong Gede もすばらしかったけど、最後に演奏した村のグループはまたすぐくて ー私は、これから一生こんなふうには小さなPuraの祭りをめぐり

歩いて生きていくんだろうなあーなんて感じてしまう。

Warungでごはんを食べてブラブラしていると、もう真っ暗で、^{お祈り} Sembahyangを待つ人たちでPuraの前はごったがえしている。

その中で、なぜ私が日本人だとわかるんだろう? Bali人の目ってすごい。“なぜわかる?”と聞くと“Baliの夜はいつも暗いからね”とあっさり返される。

^{お祈り} SembahyangをしにPuraへ入る。Sembahyangは大好き。何もかもはきだして、そして満たされる幸せ。Puraの奥ではキドウン(女性が歌う御詠歌)。そして、少女たちの^{ルジャン} Rejang (Puraをまわりを踊りながら歩く) がはじまる。Bangliの祭りはいつも豪華!

Tempat Bunga Tempat Tirta



◆Gong Gede/大編成の青銅製ガムラン。Bangliの高原地域に多く残っている。Pura Ulun Danu BaturのGong Gedeは迫力。

Tegesへ通う日々

◆スマルプグリンガン
“Gunung JatiのSemarpegulinganが聞きたい!” そう
思い続けて、バイクでTegesへ通う日々。

Puraでポーとしてると近所のBapakがやって来て、
日本人が踊りの練習をしてるから見に行こうと、
Murniの家へ連れていってくれる。

Murniの踊りは迫力の美しさ! 若い女の子のLegong
しか見たことがなかった私は、ショック。すんげー
カッコイイ!! (Murniも彼女のご主人もGunung Jatiの
踊り手だった)

やっぱり日本人には無理かも… (踊りをやってる
人、ごめんなさい) でも、Baliの女の子は言う“うま
いヘタ、素質のあるなしじゃないんだよ。神様の前
で踊りたい、という本人の気持ちが一番大事なこと”
本当だね。すごく納得。

お礼を言って帰ろうとすると、あさって結婚式が
あるからおいで、と誘っていただく。

朝早く、またしても正装してTegesへでかける。
門の前で儀式がはじまっている。お祈りとヒヨコの
生け贄。プタにしてもニワトリにしても、私にはど
うしても、この生け贄のその血の意味がわからない。
誰か教えてください。

一緒に中へ入れてもらい、儀式を見せていただく。
初めて見るBaliの結婚式。いったい何が何やらよう
わからん。と言っているうちに終わってしまった。



Tegesの村

コピとお菓子をいただき、おしゃべりしていると、
新郎のお姉ちゃんが一緒においでと言う。手を引か
れて着いた所は、近くの川。そこで、たくさんの親
族が見守る中、男と女が別の場所で清めのMandi。
そして、結婚式の衣装に着替える。美人の嫁さんと
やさしい笑顔の婿さん、そして親族の人たち、みな
なでうれしそうに家へもどっていきます。私がパタ
パタと走り回って撮影しているのをみんな笑って見
ています。そして隣で一緒にカメラマンをしていた
人は、なんと、あのGunung JatiのRinaだった。

小さな村で一생을過ごす。その村の人たちと、ず
っとうまくやっていくことは、結構大変なことだ。
逃げ場はないのだから。田舎生まれの私にはよくわ
かる。その中で人といまくやっっていけない奴はBodoh
だとRinaは言う。Rina、日本人も欧米人もBodohだら
けだよー。

◆Semarpegulingan/古来
王宮に伝わるガムラン。
特に、Gunung Jatiのスマ
ルプグリンガンの音は、
情緒豊かで、聞いてい
るとせつなくなってくる

鬱蒼と茂った
木のトンネルをぬけて
家へもどってくる

アルマ
満月のARMA
— Agung Rai Museum of Art —

Baliへ来る時、満月ははずせない！

待ちに待ったGunung JatiのKecakの夜。ARMAの野外ステージへ。ARMAの庭もチケットもチケットを切ってくれる正装したお兄さんも、なかなかの演出。

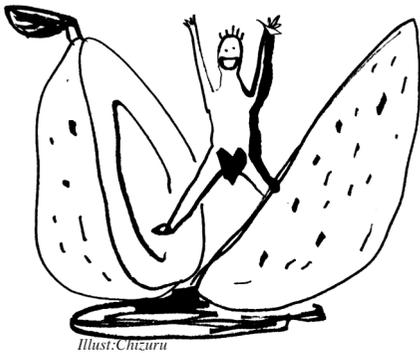
月がステージの割れ門へ昇りはじめると、祈りがはじまる。ドキドキ、ワクワク。恐い、楽しい、恐い、楽しい、すごい迫力!! Kecakの中の劇は、ハヌマン兄弟の葛藤と戦い、そして祈りで終わる。

ARMAのステージでのKecakも素晴らしいけど、TegesのPura、バンヤン樹の下でのKecakもまた素晴らしい。絶対、皆さん見て、感じて下さい。



TegesのPuraでのKecak
Rinaってやっぱり天才だと思う





(1) コス探し

ユキ

朝、6時30分頃、隣の部屋からうすい壁をつき抜け流れてくる、ラジオの大音量で目を覚ます。「この朝っぱらから、どうしてこんなにおっきな音でラジオをかけたんだ！」日本人のわたしにとっては信じられない無神経さに、はじめはムッときた。これがコス生活一日目の朝のこと。でも3、4日もするとこれにも慣れてしまった。最近では目覚まし時計がいらないから、かえって便利だわ、なんて思っている。ものは考えようだ。

デンパサールのコス（アパートもしくは下宿屋のようなもの）に住みはじめてから、もうそろそろ1ヵ月がたとうとしている。いろいろ迷ったすえの決断だったけど、思い切って決めてよかった、と今では思う。ウブドはのんびりできるし、住みよいところだし、そんなウブドが大好きで、これまで短期で踊りを習いに来ていた時はずっとウブドにばかり滞在してきたわたしだったけど、今回は長期滞在。学生ビザをとり、STSI (SEKOLAH TINGGI SENI INDONESIA = インドネシア国立芸術大学) の留学生となって、1年、2年という単位でバリに住みながら踊りを習うことができるようになったのだから、短期で習いに来ていた時は少し違った生活がしてみたい、という気持ちがめげえ始めた。もっと生活の範囲を広げたいというか……。まあ、もちろん、ウブドに住みながらもそれはできるんだけど、今までとは違う環境に身を置いてみるのもいいかもしれないな、と。かねてよりデンパサールには、いい踊り手さんがたくさんいると聞いていて興味があったし、いつかは習ってみたいと思っていた先生もいたので、ようし、それならいっそのこと、デンパサールにコスを借りて住んでみるか！と考え始めたのだった。ホームシックにかかってしまうかもしれないけど、バイクも買ったことだし、疲れたときはいつでもバイクに乗ってウブドまで戻ってこれるのだから。

コス探しをするにあたって、大変お世話になったのが、知り合いのA君だった。彼はSTSIの演奏科の学生で、家はウブドの南、ブンゴセカン村にあり、STSIの近くにも安いコスを借りていて、普段、学校の授業が忙しい時はデンパサールのコスに泊り、村や実家で何か用事がある時、たとえば村のガムラングループの練習がある時や休日などはブンゴセカンの家に帰る、というような生活を送っている（らしい）。わたしはこれまで、それほど彼と親しく話をするとはなかったのだけど、彼の兄弟たちとはわりとよく話をしていたので、ちょっと口添えをしてもらって、彼にわたしのコス探しに協力してもらうことにしたのだ。というのも、わたしが捜していたコスも、ちょうどA君が借りているようなたぐいのもだったから。

ひとくちにコスといっても、その値段や形式はさまざまだ。高めのものになると、台所、カマール・マンディ付きの日本のアパートのようなものもあるけど、ふつう、デンパサールに住む日本人留学生は、（わたしの知るかぎり）ひと月10万ルピア前後の、いわゆるホームステイ形式の部屋（あるお宅の一室に住まわせてもらう、カマール・マンディは付いていたり、いなかったりする）を借りることが多いようで、それくらいの値段でなら、なかなかきれいな素敵なお家の一部屋を借りることだってできるようだった。で、本当ならわたしもそういうところを借りたかったのだけど、金銭面でそうもいかない事情があった。それというのも、実はわたしウブドにも数か月前に一年契約で借りてしまった部屋があって（！）、つまりデンパサールに借りるコスはわたしにとってふたつめの住まいということになるのだ。ふたつも住まいをもつなんて、まあ、なんて贅沢な！とお思いでしょうが（たしかに、その通りですが）、ウブドで借りた部屋は、ひと月4万ルピアという超破格の安さで（カマール・マンディ付きでこの値段！あまりの安さに思わず即払いしてしまった）、だからデンパサールで借りる部屋もそれくらいの値段のところを捜せば、金銭的にはなんとかやっつけていける。そこでわたしは、月5万ルピア前後で借りれるという、A君の住んでいるようなコス、バリ人の学生たちが借りているようなところを捜すことにしたのだった。

オゴオゴ見物のススメ

長期滞在者 M 嬢

これを書いている今現在、ウブドは雨季の真っ最中。嵐のような雨と風で、私の泊まっている宿もバンジール（洪水）の連続。しかし雨季が明けると、やって来ます“ニュピ”。ニュピと言えば、オゴオゴ（悪霊をかたどった、張りぼての山車）。ニュピ前日、大騒ぎのパレードでこの山車が街をねり歩く。これには、雨季の間この地にはびこった悪霊をバリから追い出すのだ、という意味があるらしい。でも最近ウブド近辺は、オゴオゴの規模が縮小されてしまってちょっと残念。で、盛大なオゴオゴを経験して盛りあがりたければ、やはりこれはデンパサールへ繰り出すこととなる。デンパサールはププタン広場。ニュピ前日は陽の高いうちから、オゴオゴ見物の場所取りの人で大賑わい。物売りやカキリマ（インドネシア語でカキは足、リマが五つという意味で、五本足と呼ばれる手押し屋台のこと。手押し式屋台の足が三本、そのうち二本は車輪で残りの一本が支え棒、そして、押す人の足が二本というわけだ）もたくさん出ている。なんでも、デンパサールのこのオゴオゴ行列は、バンジャール（一番小さな村組織）ごとのコンクールとなっている様で、そりゃあ熱がはいるってもんでしょう。ププタン広場の真ん中の四辻のところには、テレビカメラが据え付けられ、陽が落ちる頃には、沿道は見物の人で身動きとれないくらい。で、肝心のオゴオゴも、これさすがコンクールだけあって力作揃い。バラ・ガンジュール（行列しながら演奏するガムラン）の音がいやでも気持ちを高ぶらせる。中には、カセット・テープでロックがんに鳴らし、電筒光らせる山車もある。

でもね、このププタン広場の真ん中でオゴオゴ見物する時は、くれぐれも注意。私は去年、Y'sacs のバッグをおもいきり三ヶ所、ナイフですばっと切られました。全然わからなかったから、あとでバッグを見てびっくり、そしてゾー。ああ、身体でなくて良かった。オゴオゴをデンパサールに見に行く時は、だからできれば手ぶらで、そうでなければなるべく取られても、壊されても惜しくないものを身につけていきましょう。

この日は、ヌサ・ドゥアあたりのブルビントンのホテル（ビントンは星、ブルを名詞につけるとインドネシア語では“～を持っている”という意味になる。で“星を持っている”つまり、よく言う5つ星とか4つ星とかのホテルのこと）からは、オゴオゴ見物のツアーが出ているらしい。この人達の指定席は、デンパサールの老舗ホテル、ナトゥール・バリの沿道に面した庭。椅子が並べられ、欧米人が飲み物片手に優雅に、オゴオゴ見物している。ププタン広場の前の四辻をまがる時のパフォーマンスは、テレビカメラの前という事もあり、確かに見応えがあるけれど、体力に自信のない人、子供連れの人、そうしてナイフで切りつけられたくない人は、このナトゥール・バリ・ホテルの庭のあたりで見物することをお薦めします。

★おわび：今年のデンパサールのオゴオゴは、近く選挙があり、民衆の集合から暴動の可能性があるという理由からか、残念な事に中止となりました。

【シリーズ・JEGOG】はじまりにあたって

堀 祐一

■ JEGOG とはいったい？

僕が JEGOG を最初に知ったのは、ビクターから出ている「ジェゴグ! 大地の響」(CD エスニック・サウンド・シリーズ 12 / バリ島サンカル・アグンの巨竹打楽アンサンブル) という CD を聞いた時である。1987 年ごろだったと思う。それ以前から民族音楽に興味を持っていたのだが、この年の 10 月にはじめてバリを訪れ脳天に風穴をあけられて帰ってきてから、しきりにバリの音楽 CD を漁っていたころだ。

当時では民族音楽の録音といえば小泉文夫さんのものか「芸能山城組」の山城祥二さんのものが有名で、CD のシリーズになっていたのは山城さんのものだった。民族音楽研究のパイオニアである小泉さんの時代とは違い、当時先端の録音技術を使用したビクターのシリーズはかなり臨場感あふれる録音だった。とはいってもこのシリーズに収められているものは、すべてが録音という技術の限界に挑戦するようなものばかりで、ティルタ・サリのガムランにせよピグミーの歌声にせよ、CD の帯域からあふれた音は最終的に想像するしかなかった。その中でも「JEGOG」の音はちっぽけなディスクに収まりきらないパワーを感じることはできたが、それ以上を想像して掴むことができなかった。しかも CD に収まっていた「ジョゲ・ブン・ブン」という曲では周りの観衆のめちゃうちゃ楽しげな笑い声や嬌声が聞こえてくるわけだが、何が起きているのかさっぱりわからない。う〜ん、これは気になる。一体どうなってるんだあ!

というわけで、どんどんこの JEGOG の音を生で聞きたいと思う気持ちが募り、次にバリへ行くときは必ず生で JEGOG を聞くぞー! と、心に誓ったのである。

■そしてバリへ

そして 1990 年の 11 月、再びバリを訪れる機会をつくる。さあて、いよいよ JEGOG だあ! と気合は入る

が 2 度目のバリでどんなガイドブックを見ても案内のない JEGOG をどうやって見にいったらいいかわかるはずもない。例の CD のライナーノーツを何度も読んでいたので、バリ島西部のジウムプラナ県ヌガラというところに行けば何とかなるだろう、ってな軽い気持ちでいたのである。

11 月 15 日出発。同行者はえりりんである。まずクタに入って 2 泊。冬の日本から来た身体を熱帯の空気に慣らすことから始め、おもむろに Ubud へ移動。Ubud での宿泊場所を決めていなかったで、Vina Wisata で適当な宿をがないか聞くと Abangan Bungalow を薦められる。決めて納得。すぐ隣のプラ・ダラムででっかいオダランが始まったばかりである。どひゃああ! こいつはラッキー! てなわけで夜な夜なオダラン通いが始まりヌガラへの探検は後回しになってしまった。

■ヌガラへの道

そして 21 日。オダランも終わりに近づき、そんではというわけでヌガラ行きを決行。レンタカーのジムニーを借り、Vina Wisata で手に入れた Path Finder (地図) を片手に一路バリ西部へと向かったのである。

そのころのバリの道はまだ開発整備の途中で、今のように広いバイパスも少なくデコボコ道が多かったのだが、Mengwi、Tabanan、Selemadeg、Pekutatan と通り抜けてどんどん進む。途中 Rambutsiwi で車共々スンバヤンしてもらい、ついでに Temple も見学。なかなか見ごたえのある寺院に感激し、再びヌガラへ向って車を走らせる。

さて、Mendoyo を過ぎたあたりからいよいよヌガラだ。おっ! こ、ここは! すげーでかい町である。う〜む、Ubud から来るととんでもなく整備された大きな町を感じる。道は広いし、信号はあるし、何やら雰囲気も都会である。ちょっと待て。もっと小さ

な鄙びた村を想像していたから簡単に見つかるだろうと思っていたが様子が違う。しかたがないから誰かに聞こうと思い、手ごろなワルンを探して昼飯をとることにする。

■ JEGOG はどこ？

ワルン（といってもかなりきれいな都会の店）で食事をするが、どうやら日本人はこのあたりではめずらしいと思われる。好奇心の固まりのような視線の中で食事した後、JEGOG ってどこで見ることができるの？と聞く。しかし本を片手にへろへろのインドネシア語とメタメタの英語と身振り手振りのやりとりでは店のおばさんになかなか通じない。悪戦苦闘の末、おばさんの口からついに出たのは「サンカル・アゲン！」。

おお！その名はどこかで聞いたぞ。そうだ、CD に書いてあった村の名前だ。うかつにも村名を忘れていた。しからばそれはどこだ、ということで地図を見てもサンカル・アゲンという地名はどこにも出ていない。（当時の Path Finder。現在のものには表記されている。）さて、ヌガラのとち側にあるのかもわからない。再び悪戦苦闘。サンカル・アゲンはどっち？近所にいたおじさんなども加わってあっちこっちだとすったもんだのあげく、何とかわかったことは「あっち」という方角である。

ふう。方角によれば少し来過ぎてしまったようだ。戻りつつ右側方面という方向を教えてもらった（ように感じた）ので、お礼を言ってそっち方向へ向かうことにする。しかし、具体的な場所でもなんでもなくただ「あっち」なので、道路脇に JEGOG を求めて目を走らせながら戻る。しかしなかなかそれらしい様子はなく、しばらく走って再び整備工場らしきところで青年に道を聞く。すると今度は逆の方向を示して「あっち」というではないか。どうやら通り過ぎてしまったらしい。

再びヌガラへ向かって戻りつつ、「あっち」の「あっち」だから「そっち」だな、とか言いながら片っ端から脇道に入っていってみることにする。

■あれだ！

う～む。ヌガラの町から離れると想像していたような小さな村の小道が続く。しばらく走る。どんどん走る。なかなかそれらしいものは見かけないが、何となく近いという気もする。（単なる気休め）

かなり走ったところで庭先に JEGOG らしきもの発見！「おおお！これかあ！？」と車を停止、そのままちょっと見入る。少し想像より小さい感じ。（後でそれはジョゲ・ブン・ブン用のものとわかる）う～む、もっと先にもあるかもしれない。再びどんどん先へと進む。どんどん走る。どんどん走って田圃道になり、海の匂いが強くなり、民家はなくなってしまった。う～む、これはちょっと来過ぎてしまったようだ。しかし気持ちのいい場所である。ちょっと休憩。

そして再び先ほどのセットが置いてある家の庭先へ戻る。今度は車を降りてちゃんと見ようと近づく。

ふむ～、これは間違いなく JEGOG 関係の何かではあるなあ、などと思っているとその家から一人の青年が出てきて近づいてきた。挨拶をするとその青年は、「さっきも前を通りましたか？」とたどたどしくも流暢な日本語で言うではないか！驚きながらもカクカクシカジカと説明すると、彼は JEGOG の演奏で日本にも行ったことがあるというではないか。やさしい顔をしたその青年は庭先にあったセットを叩きだした。おお！この音！たった一人だが確かにわかる。これこそ求めていたもの。感心しながら見ていると道を通る仲間が集まってきた。みんな農作業の途中だったようだが、お構いなしに数人が集まって叩きだす。な、なんとどんどん音が厚くなってくる！

暫し楽しませてもらった後、加わっていたみんなはまた仕事に戻っていったが、青年が言うには今夜ここで練習をするらしい。見に来いということだったので、



再び夜訪れることにする。

■そして夜

念願の JEGOG を聞けることとなり、ほっとしながら海辺へ向かう気持ちのいい場所で昼寝などしながら時間をつぶし、夕方再び青年の家を訪れた。

時間が早かったのでまだ誰も集まっていなかったが、家の人は歓迎してくれてコピなどご馳走になりながら話を聞く。そこには青年のお父さんもいて、彼も演奏で日本まで行ったようだ。話をしているうちにどこからともなく人が集まってきて、ちょっとしたお祭りのような雰囲気になってくる。

夜8時。あたりは真っ暗の中、裸電球一つのパレの下で練習が始まる。周りにはすでにかなりの村人が集まってきている。今日の演目はジョゲ・ブン・ブンだということだ。「うっ！それは確かCDに入っていた例の笑い声に包まれる謎の音楽では。」と思いながら見ているとメンバー総出の音はちょっと聞いた昼間のものはおろか、日本で聞いたCDの比でもない！

茫然と音の波に揺られていると普段着のままの踊り子が踊りだす。そして扇で観客を指名して舞台に引き上げ踊らせるではないか！そ、そういえば確かそんなことがライナーノーツにも書いてあったぞ、てなことを考えながら見ていると案の定、僕のところにも指名がきた。げーっ！辞退させてもらおうとしたが雰囲気はそんなものではない。あきらめ半分で意を決してわけのわからないすっとこどっこいな踊りで対応する。その時にあのCDの笑い声や嬌声の実態が手に取るようにわかった。どひゃあ、これかあ。

その後も次々と村人が踊る。当然えりりも踊る。なるほど誰が踊ってもウケるウケる。ウケ狙いが目的でもある。キャアキャアという阿鼻喚声と竹の音の洪水！珍しい日本からの客人はすっかり餌食にされたが、裸電球の中で踊る踊り子と演奏者、それに村の人々の笑顔がすっかり焼き付いてしまった。

練習は果てしなく続くようだったが、夜もすっかり更けてきたのでUbudへ帰ることにする。帰り際に青年にお礼を言うと、26日に今度はJEGOGそのもののレコーディングがあるというではないか！それはこんなものではなくもっとでかいやつだという。うひゃあ！絶対来る！ということで26日の再訪を約束してその日はUbudへ帰ったのである。

■そしてふたたび

帰るとき青年にもらった名刺にはI Kutut Swentraと書いてあった。(しかしこれは彼のものではなく、グループのリーダーのものであることが後日わかる。青年はI Nym. Sumiartaという名前前でSwentraさんのお兄さんの息子であることも後日わかるのであるが。)

さていよいよ明日だという25日に、これは誰かにも

教えてあげて一緒に楽しまないといけないなど思いながら、メカール・サリを見に行ったときティルタ・サリでも見かけていたカメラマンらしき男に声をかける。「ねえ、明日一緒にヌガラまでJEGOG見に行かない？」彼はJEGOGを知らなかったが、おもしろそうだから行くとのこと。このカメラマンがその後も付き合うことになる小原孝博である。

いよいよ26日当日、ふたたびレンタカーでヌガラへ向かう。後席が縦並びのジムニーで3人乗りはなかなかつらいが、小原は頭をぶつけながらヌガラまでの3時間数十分あまりを耐えた。

一度来ているからもう迷うことはない。(自慢ではないが、土地勘と方向感覚はいい)順調に前日の青年の家まで到着。しかし青年は不在で、どうやら場所はどこではないらしい。(どうやらくれた名刺で場所を教えつつもりだったようであることが後でわかる。)居あわせたお父さんに少し戻った脇道を入ったところへの道順をちゃんと聞き、ふたたび移動して到着。なかなか広い敷地の家の前には数台の車が止まっている。

おずおずと中へ入っていくと日本人の録音スタッフがわらわらといてレコーディングの準備中。あちらは突然現れたわけのわからない日本人に少し戸惑ってるみたいである。青年を見つけて挨拶。彼は母屋のテラスの上でいろいろと指示をしている女の人に何やら話をするとそそくさと楽器の準備にかかってしまった。我々のことをキッと睨み、「邪魔しないように隅っこにいてね。それとチャーターだから写真はやめてね。」と言った彼女はテキパキとインドネシア語を操り、メンバーに指図をしている。今だから書いてしまうけど、この時は怖いコーディネーターだと思った。(ごめん、和子さん。)

ずうずうしくもやってきた招かれざる客である我々はセッティングの邪魔をしちゃいけないと思い、隅っこの方で見物していることにする。(これも後でわかったことだが、どうやら青年(Sumiarta = 通称スミ)は





この時に部外者の日本人を呼んだことで怒られたらしい。推測だけど。ごめん、スミ。）

見ていると芝生の庭には JEGOG とおぼしきセットも組まれていく。レコーディングのセッティングもいろいろ行なわれていく。かなりたくさんの方が集まりだして、そのうちに何やらいろいろと始まった。

まず、誰だかわからないが偉い人の挨拶やら式典のようなことが行なわれる。日本からの録音にあたってのことらしい。さらにテングロンハットをかぶったリーダーらしき人（後にこれが Swentra さんだとわかる。）が、メンバーや集まった人々にいろいろと指示したり話たりする。

やがて演奏が始まるが、JEGOG ではない。いろいろな新作舞踏やらトベンやら、さらには古典らしい芸能と思える竹の筒で米をつくような音楽やらである。

どれもめずらしいものなのでこれらもおもしろく見ていたが、JEGOG の録音は始まらない。どうやら夜になってからのようだ。

■そして夜

いろいろな余興（だったのか？）が終わるとレコーディングのスタッフは車に乗ってどこかへ行ってしまった。どうやら夜の録音の前にヌガラ街のホテルへ戻って食事などしてくるらしい。庭では再びセッティングをし直している。JEGOG のセットが置き場所も変えられて2台並べられる。脇に棒が立てられて、照明となる蛍光灯を取り付けたりする作業を手伝いながら JEGOG を観察する。う～む、でかい。

食事をどうしようか迷っていると、何と先程の怖いコーディネーターがナシ・ブックスをくれるではないか！ 録音スタッフにも出さない食事を分けてくれた上に、「この後 JEGOG をやるけど録音の邪魔にならない

いところで見えていいから。」と言ってくれて、いやあ、ひょっとするとやさしい人なんじゃないか、などと思いつつ（ごめん、和子さん）ありがたくいただき、そそくさと隅っこで始まるのを待つことにする。

暗くなるころスタッフが戻ってきて JEGOG の配置が変わっているのを見、あややあってな感じでマイクのセッティングを再びやり直しはじめる。

そのうちに何やら村人がいっぱい集まってきて庭の周りを取り囲みだすわ、屋台のワルンは並ぶわ、敷地の奥では恒例のギャンブルは始まるわで、まるでオダランのようになってきた。

そんなすごい状況になってきたところでいよいよ JEGOG の演奏は始まった。

■ JEGOG !

その演奏とムバルンに関しては、今ここに書くことはできない。どう書いていいかわからない。僕の稚拙な文章で表わせるようなものではない。なにしろスゴイ！としか言えない。

その日、サンカル・アグンの大地に鳴り響いた巨大なパワーの共鳴はすべてを振動させて記憶までプレさせた。目に見えないパワーの震源地となったその場所から核爆発のように拡がった響きは「壮麗な光」、つまり Suar Agung の意味そのものだった。

見上げた空には大きな満月があったことを覚えている。

■そして、その後

それ以来バリへ行くたびにヌガラへは何度も通った。徐々にいろいろわかってきた。怖いコーディネーターは実は Suar Agung のリーダーである I Kutut Swentra さんの奥さんである和子さんだとわかった。いきなり押しかけた我々ではあるが、Swentra さんと和子さんにはその後も大変よくしていただいている。もう数十回は体験した JEGOG であるが、一生あのパワーと響きに共鳴して生きていきたいと思っている。

何と言っても Suar Agung ファンクラブ筆頭であると自負している。非公認だが。（笑）また、Swentra さんと和子さんというそれぞれの個人としてのファンクラブ筆頭とも思っている。これももちろん非公認。（爆笑）

ほんとは家族と同様に感じているのもあるけど、実はこれは内緒である。（大爆笑）

● BUKU-BUKU 紹介 ●



神話大戦・ラーマヤナ編（上・下巻）

著者：永井 豪

発行所：徳間書店

定価：1,300 円



UBUDで舞踊を観るのが好きな人だったら、今までに必ず一度は観ている「ラーマヤナ」。ご存じ、古代インドから伝わる長編叙事詩です。漫画家である永井豪さんがどうしてラーマヤナをマンガにしたかのいきさつは、上巻の末にも載っていますが、確かに東南アジアのあちこちで今でもラーマヤナは、舞踏劇として民衆に親しまれています。

…が、私たち日本人には、結構馴染みの薄いものでした。それが有名な漫画家の手によって、コミック化されたのはエライ！ それも、ある部分の解釈は別にして、なるべく原本のストーリーを忠実に再現してくれているのです。でも、かえって神々を宇宙人に見立てるとことか、魔王ラワナ（本ではラーヴァナになっている）の描写とかが、バリのラーマヤナを知ってる人たちにとっては大いに意外で超おもしろいと思う。この本を読むと、舞踏劇になっている、バリのラーマヤナには出てこない知られざる場面がたくさん出てくるし、なによりもわかりやすく描かれていてバグース。登場人物なんかも、UBUDで観るダンサー達を思い出しながら読んでしまって、うう～っです。

●マハルディカのラクシュマナは、もう観られないのね…。(涙ぐむ)

これ はあ〜んだ?
Apa itu?

問題 = 高さ7メートルほどもある竹で作られたこの斜めの台は、いったい何に使われるものでしょう？

ヒント = 水泳の高飛び込みの台ではないようです。もちろん、雪の降らないバリではスキーのジャンプ台ということもありません。これではヒントになりませんね。あまり見かけることはありませんが、火葬式に使われるものです。「見かけないもの

がどうしてわかる！」と叱られそうですが、そこをなんとか考えてください。

解答 = バリ語で TRATAG と言います。火葬式で高いバデ（遺体を収めて火葬場まで運ぶ塔の形をしたもの）から遺体を降ろす時に使いますが、最近あまり見かけることはありません。昨年12月28日の UBUD の王族の火葬式に、この写真の TRATAG が使われました。高いバデは王族と貴族の階級にしか許されません。そして、今では、これらの階級の人々も権力を鼓舞する必要もないので、お金のかかる高いバデを作らなくなりました。それに、電線にひっかかってしまうという理由からも高いバデを作らなくなったようです。



Peliharalah Lingkungan UBUD

UBUD の環境を考える

久保田 博巳



今回 UBUD に滞在している時、UBUD に JEGOG のガムラングループが出来たという噂を聞いた。私が知るところでは、JEGOG はバリ島の西、ジュンプラナ県ヌガラ郡独特の芸能である。何の目的で UBUD に JEGOG なのか、主催者に問い合わせしていないので、なんとも言えないがビジネスではないことを心から願っている。たとえば、ARMA（アグン・ライ・ミュージアム）で、バリの芸能を紹介するというので、他の村からガムラングループを呼ぶことは、ミュージアムの役目としては考えられることではある。が、他の村の芸能を UBUD の人がやってしまうというのはどうかと思う。私の考えでは、UBUD には、ここで受け継がれてきた素晴らしい芸能があり、これからはそれを保存・育成することの方が重要ではないだろうか。もしかすると UBUD の芸能が廃ってしまうという危惧もあるというのに、なにも他の地域の伝統芸能を持ってくる必要はないのではないかと。観光客の一人としては、バリの芸能がすべて鑑賞できればそんなありがたいことはないのだが、それでは UBUD が芸能のデパート

となり、なんでもそろっているのだが、なにか肝心なものが足りないということになってしまうのではないかと。それは、UBUD の文化保存という意味では少し問題ではないだろうか。UBUD の村人が UBUD で JEGOG を演奏することは、土佐の阿波踊りを名古屋で名古屋人が、これが本場の阿波踊りだと言って、お客さんからお金を取っているのと同じであり、そんなことは許されるものではない。日本では、町おこし村おこしで経済の分散、そして活性化を計ろうとしている。東京傾倒で我が町、我が村に銀座を作ればよいと考えて、その町、その村の特徴のあるものを捨ててしまった付けが今ごろ回ってきたのである。観光の島バリも、その地域独特の芸能を鑑賞するために、その村へ出掛けて、その村にお金を落とせば、その村の芸能や文化の保存のためにもなるのだ。そして、観光客の分散も考えないと UBUD の人口の増加が急速に進むことが考えられ、UBUD が無秩序に発展してしまう心配がある。こんな考えは私のわがままなのだろうか。皆さんはどう思いますか。

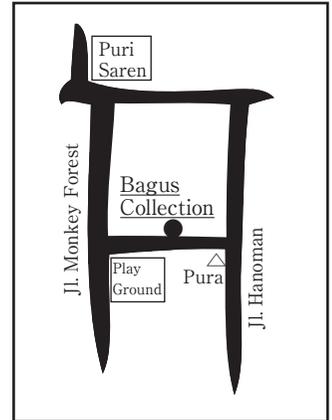
Toko ◇ BEST 店

Bagus Collection

ウブドのパサールから Jl. モンキー・フォレストにはいり、サッカー・グラウンドの角を曲がると、そこは最近目立ってハイセンスなお店の増えている Jl. デウィ・シータ。中でも“バグース・コレクション”は、ひとときわオシャレなウインドウ・ディスプレイに、女性ならつい足がとまってしまう筈。

ここの洋服はモノトーンが主流。渋い色合いでプレーンなデザインなので小物次第で変身可能。奇抜に個性を主張していないのに身につけるととっても個性的に見えてしまうというスグレモノばかり。洋服はトップが3万～4万 Rp、ボトムが4万～5万 Rp と、ちとお値段ははりますが、これ、夏場ならきっと、夜の六本木あたりに着ていってもぜ～んぜん大丈夫。そんなに堅くない会社だったら、通勤にも OK ! の筈。日本円にして 4,000 円から 5,000 円で上下のコンビネーションが買えてしまうのですから、夏のバーゲンで洋服をまとめ買いする人、今度からそのお金を持ってここ“バグース・コレクション”へいらっしやい。満足の一品がきっとみつかります。

営業時間 / 朝 8:00 ~ 夜 9:00
Jl. Dewi Sita, Padang Tegal, Ubud, Gianyar / Telp: 0361-976611



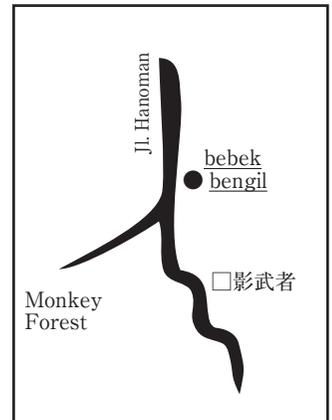
Warung ◇ 味な店

Bebek Bengil

今更ながら紹介する必要もない程、有名な“ベベ・ブンギル”ではありますが、7周年を迎え、新メニューも増え一層美味しくなりました。

ここのカルボナーラは生クリームをふんだんに使ってあって大満足一品ですが、新メニューにあるクリーミー・フェットチーネも、クリーム系パスタが大好物の女の子達大喜びの美味しさ。しいたけと野菜の正油いためスパゲティ、その名もスパゲティ SHITAKE は、どこか懐かしい日本の喫茶店メニューの味。チキンとカシューナッツのびりっと辛い生姜いためジンジャーチキンは、ご飯のおかずにはぴったり。そして食後のデザートの新メニュー、ブラック・ルシアンパイは、ウオッカをきかせたチョコレートムース・パイ、ちょっと気の利いた大人のデザートです。

店の奥にバー・カウンターも出来て、ここがトテモ落ち着ける。冷えた白ワインなどオーダーして、ウブドの夜をオシャレにキメてみては…。土曜と日曜の夜は、庭のバレで竹ガムランの演奏もあります。



Jl. Hanoman Padangtegal Ubud. 80571 BALI / tel. (0361) 975489

Tokoko² Sayang + お店紹介

Sari Bamboo Bungalows

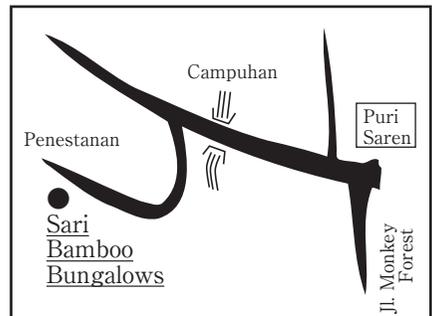
長期滞在者 (0)

6年ぶりに訪れてみたバンガロー。

6年前、日本人女性が庭に植えた“みつば”が、今でもバンガローの人々の手によって育てられていた。

当時、ペネスタナン村は長期滞在の旅行者が多い地域であった。それは、今でも変わらないようである。起伏のある地形と人里離れた静かな環境が好まれるのであろう。

サリ・バンブー・バンガローは、三棟のバンガロー・タイプと一棟に二部屋の宿泊施設がある。規模は小さいが、庭が広々としていて落ち着く。バンガローの一棟は長期契約で貸したようで、借り主の手で改造中であった。UBUDは年々長期滞在者の増える傾向にあり、台所付きの貸家の要望が多いようである。現在のところ、料金はバンガロー・タイプが一泊ダブル（ホットシャワー付）でRp.35000-であるが、今後、台所付きに改造して、長期滞在者向けに貸す予定だそうです。長期滞在希望の方には、ペネスタナン方面が狙い目のようです。



SARI BAMBOO BUNGALOWS
 Owner: Wayan Sari
 Jl.Raya Penestanan Ubud
 Phone(0361)975547
 PoBox:152 UBUD

旅人一声 Pesan & Kesan

裕子の友人

6年前に、大学の卒業旅行で訪れて以来の UBUD です。すっかり町並みが変わってしまったのには、びっくりしてしまいました。それと、夜市・セゴールがなくなってしまったのには、がっかりしてしまいました。当時、旅人のお腹を満たしてくれたセゴール、私も毎夜、夢遊病者のように出掛けていったものです。そこで知合った多くのバリ人にたくさんの思い出があります。ブデイ、マデ、カボ、アリ、皆今はどうしてるのかな？ 影武者の伊藤さんに聞いたら、ブデイは、モンキー・フォレストにあるブトラ・バーでマネージャー。昨年結婚して、つい最近子供が生まれて、お父ちゃんになった。そして、マデもやはり結婚して、今では二人の子持ち。ペネスタナン村にある、アピ・アピというバンガローで働いているそうです。カボは、ラマ・ツアーの日本語ガイドとして頑張っていて、ちかじか結婚する予定だそうです。アリは、何をしているのかわからないが、元気になっていることはたしかだそうです。そうか、6年も経つと、こんなに人も環境も変わるものなのだ、街が変わってしまうのも当然のような気がします。でも、心までは変わらないでね。

その他のニュース

■コンピアン、中学生と結婚?…か?

去る2月2日、ご存じ“CENTIL CILI”のコーディネーター、グスティ・コンピアン(29才)がブラバトゥ村クムヌから可愛いお嫁さんをもたらしました。新婦はまだ中学生という噂でしたが、どうもこの真相は、彼女が中学生のころからの交際だということでした。名前はグスティ・プトゥ・ラナディちゃん。彼女の年齢はまだなんと19才。バリの慣習(?)どおり、もうすでに子種は仕込んだようで、近々パパになるコンピアン、いつまでも、のんびりはしておれないと、『極通』に助けを求めてきました。そこで少し“CENTIL CILI”の宣伝に一役かってでることになりました。

グスティ家長のグスティ・サナ氏は有名な画家。長男コンピアンは踊り手で絵描き。次男カデはガムラン奏者で絵描き。そして、長女クトットゥは踊り手として活躍中。その下の妹たちも踊り手です。そんなアーティスト一家の中で、バリの一般家庭の生活習慣をのぞきながら芸術、芸能を体験してみませんか?というのが“CENTIL CILI”の営業趣旨です。そして営業内容は★バリ舞踊、ガムラン、絵画が習えます。★バリ舞踊、結婚式の衣装を着て写真撮影ができます。★バリ風結婚披露パーティができます。などです。“極通”読者のみなさん、応援してやってください。具体的なお問い合わせ、ご予約は TELP:(0361)976434 までどうぞ。



■ニュークニンの橋梁完成!

“極通” Vol.15で紹介したサーカス・ブリッジの上に、Sの字の橋道が完成。着工1996年5月27日、ウブドから南西方面、モンキーフォレストの西側を流れるWOS川にかかる橋で、シンガカルタとニュークニンを結んでいます。橋は長さ90m、幅10m、コンクリート製で、30mの深さの谷に、総計10トンの支柱が埋設され、総工費14億ルピアをかけて予定より14日も早く、2月初旬に完成しました。これだけの規模のS字型の橋はバリで初めて。今までUBUDからムングイヤタバナン方

面へ出掛けるのに、クデワタン経由であったのが、この橋の開通でかなり近くなりました。おかげでジェゴグ・ツアーのヌガラへは30分の時間短縮。開通して一ヵ月目、交通量は日毎に増え、トラックや大型バスも頻繁に走るようになりました。一般住宅地の行き止まりの道が、突如として幹線道路になってしまったのです。はたして近隣住人の反応はいかがなものでしょうか。賛否両論、きっと戸惑っていることでしょう。橋までの既存の道は、すでに穴ボコだらけ。毎日変化する穴ボコに夜の走行は危険がいっぱい。橋の両端には花壇と歩道が設けられ、休日の昼間には、デート・スポットや観光名所になるほどの景観ですが、夜は街灯が一本も設置されておらず、Sの字の橋道は暗やみに突っ込む感じでなんだか怖い。便利さを求めると、快適な空間がなくなってしまうことが多々あります。この中庸を探すが、これから求められると思います。



■UBUDで初・日本人女性マネージャー誕生!

ブンゴセカンにある、アグン・ラカ・バンガローは、日本のガイド・ブックにはお馴染みで、すでに評判の高いホテル。ホテル側では、これまでの評判に甘えず、より一層お客様のニーズに答えようと、今回、UBUDで初の日本人女性マネージャーを採用しました。彼女は期待通りの働きで、お客様、オーナー、そして従業員の信頼を得て、ただ今人気上昇中。これで、これまでも増してホテルのサービスにも期待できます。

女性マネージャーの名前は、中田 恵さん(?才)。経歴などは謎となっていますので、興味のある方は直接本人に問い合わせしてみてください。聞くところによると、恵さんは、バリが大好きで、いつか必ず長期滞在をしたい、それでもできれば仕事をしながら滞在するという夢がありました。恵さんの夢パワーがバリの神様に通じたかのようなタイミングで、今回の仕事が決まり夢が実現しました。これから、何かと苦労が多いと思いますが、夢を実現させたパワーで良い仕事をしてください。

おしらせ

■移転のお知らせ

「影の出版会」の日本連絡先として軒先を提供しているポトマックですが、この度、麻布方面より大森の山王へ本社を移転しました。従って、軒先の下にいる「影の出版会」も移転となります。(笑) 尚、e-mail アドレスと郵便振替番号等は変更ありません。よろしくお願います。またこの引越に伴い、極楽通信発行作業が滞り、BALI への版下入稿が遅くなってしまいました。今か今かと首を長くして待っている皆様、ごめんなさい。もうすこおしお待ちくださいね。／ポトマック菅原

●新連絡先

143 東京都大田区山王 3-29-1 ブルク山王 302 ポトマック株式会社内「影の出版会」
tel.03-5743-7100 fax.03-5743-7101 e-mail. eriko@potomak.com

アムゴンばん

Pengumuman

■ジェゴグの定期公演は、毎月第三日曜日

今まで不定期で行なわれてきた「ジェゴグツアー」ですが、たくさんのご要望を受けて定期公演することになりました。

毎月第三日曜日です。料金は35ドル。ナシチャンプール、水、トランスポートを含みます。

スケジュールは下記の通りです。

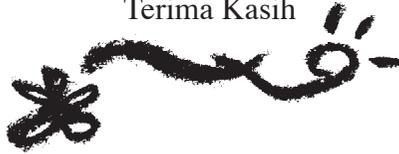
- 14:30 「影武者」集合。
- 15:00 ミニバスにて出発。
- 18:00 ヌガラ到着／雑談しながら夕食。
- 19:00 開演／心ゆくまでジェゴグの神髄ムバルンを！
- 24:00 UBUD 着／UBUD 地区に限り各宿経由。

お問い合わせは、「Apa? 情報センター／Tel.96246」までお気軽に！

アムゴンばん、アムゴンばん、アムゴンばん、アムゴンばん



Terima Kasih



発行人：伊藤博史

編集：伊藤博史 / 佐藤由美 / ほり&えり / 中田 恵

エディトリアルデザイン：菅原恵利子

写真：堀 祐一 / 伊藤博史

カバーイラスト：ダバカン（駄場 寛）

極楽通信「UBUD」Vol. 19

1997年5月15日発行

発行・販売：影の出版会

Hiroshi Ito: d/a Pak Wayan Karta Wigraha

Jl. Suweta No.16, Ubud. Bali,
80571, Indonesia tel.(0361)96134

©1997 影の出版会 禁無断掲載





影の出版会事務局

- BALI 本部 Hiroshi Ito: d/a Pak Wayan Karta Wigraha Jl.Suweta No.16,
Ubud. Bali, 80571, Indonesia tel.(0361)96134
- 日本連絡先 〒 143 東京都大田区山王 3-29-1 ブルク山王 302
ポトマック株式会社内, tel.03(5743)7100 fax.03(5743)7101